

幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究

－ 親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連 －

筑波大学大学院 日本学術振興会特別研究員 三 鈺 泰 代

A Research on the Relationship between Parenting Skills of Parents of Preschool Children and Children's Behavioral Tendencies.

University of Tsukuba

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science SANKO Yasuyo

要 約

本研究では、まず、幼児期の子どもをもつ親の養育スキルを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行った。因子分析の結果、9因子45項目からなる養育スキル尺度が作成され、一定の信頼性・妥当性を有した尺度であることが示された。さらに、親子の遊び場面の実験的観察調査からも、作成された養育スキル尺度の妥当性が一部支持された。次に、親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連を検討した結果、子どもの向社会的行動および問題行動に対してそれぞれ異なる養育スキルが影響を与えていることが明らかとなった。

【キー・ワード】 養育スキル, 幼児, 子どもの行動傾向

問題と目的

近年、わが国においては幼稚園・保育所、子育て支援センター、NPO等により子育て支援が多様に展開され、親のストレス軽減や子育てスキルの改善、子育ての喜びや自信の向上に有益でありそうだという見通しが立ち始めている（無藤，2008）。その一方で、依然として子育てに不安や悩みを抱える親は多い現状である。深谷（2008）は現在の育児の底流に①不慣れ，②孤立，③連続の3つがあり、母親の孤立感を取り除くことの重要性を指摘している。

子育ての有能性を高めたり、子育てに関する悩みを持つ母親の支援という立場から、近年、日本においてもペアレント・トレーニング（Parent Training；以下PTと略す）の実践が注目されるようになってきた。PTとは「親に自分の子どもに適応行動を獲得させたり問題行動を減少させたりすることができるように、行動療法の講義や実習を系統的に行う行動療法の一領域（大隈・免田・伊藤，2002）」と定義され、親は子どもの行動を理解し、子どもがよい行動を学習し実行するのを助けるために必要な養育スキルを学ぶ。日本ではAD/HD児の親への支援を中心にPTが実践され、その効果が報告されてきている（例：大隈ら，2002；藤井，2003；上林，2003）。これらのプログラムは一般の母親を対

象にはまだ積極的に導入されていないが、子育ての仕方がわからない親や子育てに自信の持てない親が多いといわれる今、有効な子育て支援の一つとして期待が高まっている。

PT では、親の不適切な養育行動の変容と家族内の対人環境の修正によって子どもの問題行動を低減するという試みがなされている。したがって、PT が効果的に行われるためには、親のどのような行動が子どもの問題行動の低減や好ましい行動の増加にとって有効であるかを明らかにする必要がある。その際に、「養育スキル (Parenting skills)」に関する研究の知見が参考になる。近年では、母親が子どもに働きかける行動に注目した「養育スキル」に関する研究がわが国でも行われるようになってきた。佐藤・佐藤・岡安・立元 (2001) は、「罰」、「一貫性のないしつけ」、「援助的な言葉かけ」、「関心」、「コミュニケーション」、「制限」の6因子 27 項目からなる養育スキル尺度を作成し、母親の養育スキルが子どもの社会的スキルや母親の心理的ストレスに関連していることを明らかにしている。さらに、三鈷・濱口 (2006) は母親の養育スキルを測定する尺度を作成し、母親の育児不安と養育スキルが子どもの問題行動に与える影響について検討した。しかし、十分な信頼性が得られなかった下位尺度があることなどから、幼児期の親の養育スキルを測定するために、信頼性と妥当性を兼ね備えた、より包括的な尺度が作成される必要がある。さらに、これまでの研究においては母親の養育スキルを扱った研究が多く、父親の養育スキルが子どもに与える影響はほとんど検討されていない点も課題といえる。加えて、親評定と保育者評定という2つの視点から子どもの行動傾向を測定し親の養育スキルとの関連を検討すること、親の自己報告式の尺度で測定した養育スキルが実際の親子のコミュニケーションを反映したものとなっているか親子の行動観察によって妥当性を検証することも必要であると考えられる。

以上より、本研究では、①幼児期の子どもをもつ親の養育スキルを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性を検討すること【調査1・3】、②親評定と保育者評定によって子どもの行動傾向を測定し、親の養育スキルとの関連を明らかにすること【調査2】を目的とする。子どもの行動傾向については、向社会的行動、外在化問題行動、内在化問題行動を取り上げ、それぞれに与える影響の検討を行う。

(なお、方法および結果のうち、中間報告(発達研究2008年22号)と重なる部分については、冗長になるのを避けるため、必要事項のみを重ねて記載し、簡潔にできる部分は簡略化した。)

方 法

【調査1・2】

調査対象者：茨城県内の保育所・幼稚園に通う2～6歳児の母親・父親1087組および母親44名(調査1：父母484組、調査2：父母603組および母親44名)を対象とした質問紙調査を実施した。さらに、調査2の子どものクラス担任28名に対しても質問紙調査を実施した。

調査時期：2007年6月～9月。

手続き：茨城県内の公立保育所8所、公立幼稚園7園(調査1：保育所3所・幼稚園3園、調査2：保育所5所・幼稚園4園)に協力を依頼し、質問紙2部(父親用と母親用、同一のもの)と保護者あての依頼書を入れた封筒を各施設において一斉に配布し、回答した質問紙を回収した。質問紙の配布から回収までの期間は2～3週間程度とした。調査2では、保護者からの質問紙を回収後、担任保育

者を対象に園における子どもの行動傾向を尋ねる質問紙調査を実施し、クラスの規模にあわせて各クラス 10 名程度の子どものついてて評定を求めた。

調査内容：

<調査 1 の質問紙の構成>

- ① 調査対象者および家族について尋ねる項目：回答者の年齢、性別、職業、家族形態、等。
- ② 育児不安を測定する尺度：牧野（1982）の育児不安尺度 14 項目（4 件法）。
- ③ 養育スキルを測定する項目：54 項目の養育スキル尺度項目を独自に作成した（三鈷，2008b）。
- ④ 養育態度を測定する項目：戸田（2000）の養育態度尺度より、権威的養育態度の「暖かさ／関係」、
「言語的勇気づけ」の計 11 項目（5 件法）。加えて、TK 式親子関係検査（品川・品川，1992）より「非難」、
「矛盾」の計 16 項目（4 件法）。

<調査 2 の質問紙の構成>

- ①～③ 調査 1 と同一。
- ④ 子どもの向社会的行動を測定する項目：森下・庵田（2005）向社会性尺度 11 項目（4 件法）。
- ⑤ 子どもの問題行動を測定する項目：2～3 歳児；CBCL/2-3（中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡，1999）より、「反抗尺度」、
「分離不安尺度」の計 23 項目（3 件法）。4～6 歳児；CBCL/4-18（井濶・上林・中田・北・藤井・倉本・根岸・手塚・岡田・名取，2001）より、「攻撃的行動尺度」、
「ひきこもり尺度」の計 29 項目（3 件法）。

<担任保育者への質問紙の構成>

各クラス 10 名程度の子どものついてて、以下の項目それぞれに回答を求めた。

- ① 子どもについて尋ねる項目：対象となる子どもの年齢および性別を尋ねた。
- ② 子どもの向社会的行動を測定する項目：森下・庵田（2005）の園での子どもの行動尺度の「向社会性尺度」7 項目のうち、3 項目を使用した（4 件法）。
- ③ 子どもの問題行動を測定する項目：2～3 歳児；CBCL/2-3（中田ら，1999）の「反抗尺度」より 3 項目、「分離不安尺度」より 3 項目。4～6 歳児；CBCL/4-18（井濶ら，2001）の「攻撃的行動尺度」より 3 項目、「ひきこもり尺度」より 3 項目（3 件法）。

【調査 3】

調査対象者：茨城県在住の 3～6 歳児の母親 17 名、父親 4 名を対象に、親子の遊び場面の実験的観察調査を実施した。母親 17 名のうち、日本語以外の言語で遊んでいた 1 名、参加児以外のきょうだいが親子の遊びに同席した 1 名は分析から除外した。なお、父親の参加者が少なかったため、今回は母親のみを分析の対象とした。

調査時期：2008 年 6 月～12 月。

手続き：茨城県内の公立保育所・幼稚園および子育て支援団体等を通じて「親子の遊びに関する調査」として案内を配布し、調査参加希望者を募集した。参加希望者に対して調査の目的や趣旨、実施内容、謝礼、倫理的配慮などを書面で説明し、調査協力への同意を確認した。調査開始時にも、同様の説明を書面および口頭で十分に行い、調査開始後も調査対象者の意思により、回答したくない項目に対す

る回答拒否や、調査自体の中断が可能であることを説明した。同意書にて調査への参加意思、ビデオ撮影および録音の許可も得た。実験に先立って、調査2で用いた質問紙に回答を求めた。

実験内容：

(1) **実験場所：**大学内のプレイルームにおいて個別に調査を実施した。条件を統一するために、ボール・フラフープ・クルマ・人形・おもまごと・パズル・ブロックなど数種類の玩具をプレイルーム内に用意した。実験室および観察室には計3台のビデオカメラを設置し、親子の遊びの様子を撮影した。実験中、プレイルーム内は親子だけになり、調査者らは隣室の観察室からプレイルームの様子を観察した。プレイルームの配置を図1に示す。

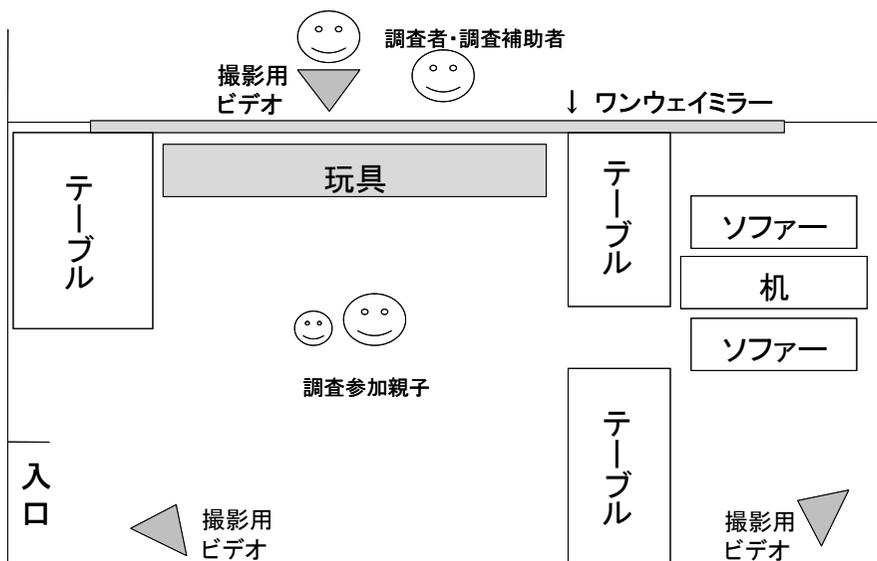


図1 観察時のプレイルームの見取り図

(2) 「親子の遊び」の内容：寺西（2006）を参考に，“子PLAY”親PLAY”の2種類の遊びを行うように教示した。“子PLAY”とは子どもがやりたい遊びを親と一緒にやる遊び方，“親PLAY”とは親が子どもをリードしながら子どもに誘いかけて遊ぶ遊び方であり、実験時には“子ども主体の遊び”“親主体の遊び”と説明した。

(3) **実験の流れ：**最初、実験室に慣れるために親子の自由遊び場を10分間設けた。遊び方に関する説明後、①子PLAY（7分間）、②親PLAY（7分間）、③片付け場面（5分間）とした。①②の実施順序はカウンターバランスをとった。各場面の切り替えの際には、調査者が実験室に入室し、次の時間の説明を親子に伝えた。

得点の算出：撮影されたビデオは、10秒間を1インターバルとするタイム・サンプリング法により、寺西（2006）の親子の関わり行動カテゴリーを用いて評定された。「注目する」「笑顔で接する」「目で合図する」「スキンシップ」「質問」「指示する」「叱る」などの19カテゴリーからなる。10秒間（1インターバル）に見られた行動について、あてはまる行動カテゴリー全てにチェックを行った。3台

あるビデオカメラのうち、最も母親の表情が見えるものをメインカメラとし、必要に応じてサブカメラも参照しながら分析を進めた。①②場面は42インターバル、③場面は30インターバルの合計得点をカテゴリーごとに算出した。

行動評定の信頼性：行動評定の信頼性を検討するために、分析対象となった母親15名のうち、ランダムに4名分(26.7%)のデータを選出し、心理学を専攻する大学院生と筆者が独立に評定した。評定の一致率を算出した結果、①子PLAYが84.3%、②親PLAYが82.1%、③片付け場面が85.6%、3場面の平均一致率は83.8%であった。それぞれの一致率が80%以上であり、信頼性が認められたため、残りのデータについては筆者が一人で整理し、その結果を使用した。

結果と考察

1. 養育スキル尺度の因子構造および信頼性の検討【調査1・2】

調査1・調査2あわせて782名(母親519名、父親263名)の回答を回収した。回収率は母親45.9%、父親24.2%であった。養育スキル尺度の尺度構成については、調査1と調査2をあわせたデータを用いて分析を行った。因子分析を行った結果、「誘導的しつけ」、「感情的叱責」、「注目・関与」、「スパンキング」、「物的報酬」、「援助的コミュニケーション」、「きげんとり」、「不適切行動の無視」、「身体的攻撃」の9因子45項目からなる養育スキル尺度が作成された(三鈿, 2008b)。また、養育スキルの各下位尺度について、クロンバックの α 係数を算出し、内的一貫性を検討したところ、「きげんとり」($\alpha=.62$)および「不適切行動の無視」($\alpha=.68$)については α が.70を下回る値であったが、使用に耐える範囲内の信頼性におさまっている。その他の下位尺度は.76-.90の値をとり、一定の内的一貫性が確認された。

2. 養育スキル尺度の基準関連妥当性の検討【調査1】

調査1のデータ(母親220名、父親120名)を用いて、養育スキルの基準関連妥当性の検討を行った。「非難」、「矛盾」、「暖かさ/関係」、「言語的勇気づけ」、「育児不安」の各尺度得点と養育スキル下位尺度得点との相関を父母別に算出した結果、既存の養育態度を測定する尺度とおおむね予想された関連が見られた(三鈿, 2008b)。したがって、本研究で作成された養育スキル尺度は、父親・母親の養育スキルを測定する尺度としてある程度妥当なものであると言える。

3. 実験的行動観察調査による養育スキル尺度の併存的妥当性の検討【調査3】

まず、分析の対象となった15名の母親の基本的属性を述べる。母親の年齢は20代が6名(40.0%)、30代が7名(46.7%)、40代が2名(13.3%)であった。うち、有職者が4名(26.7%)、専業主婦が11名(73.3%)である。調査に参加した子どもの月齢は平均55.27ヶ月(±13.10)、男児が6名、女児が9名であった。

(1) **養育スキル尺度得点：**実験参加前に回答を求めた質問紙調査から、分析対象とした15名の母親の養育スキル尺度の各下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出した(表1)。同様に、三鈿

(2008a) で抽出された養育スキル尺度の3つの高次因子「援助的・肯定的関与 (F1・F3・F6)」「攻撃・叱責 (F2・F4・F8・F9)」「きげんとり・物的報酬 (F5・F7)」得点も各下位尺度得点を単純加算して算出した。

表1 観察調査に参加した母親の養育スキル下位尺度得点の平均値と標準偏差 (N=15)

	範囲	最小値	最大値	平均	(SD)
F1: 誘導的しつけ	6~24	17	24	21.27	(2.74)
F2: 感情的叱責	8~32	11	25	18.87	(3.91)
F3: 注目・関与	6~24	11	23	17.60	(3.36)
F4: スパニング	4~16	4	13	9.13	(2.33)
F5: 物的報酬	4~16	6	14	10.07	(2.15)
F6: 援助的コミュニケーション	7~28	18	28	23.53	(3.20)
F7: きげんとり	4~16	5	11	7.67	(1.80)
F8: 不適切行動の無視	3~12	5	12	8.20	(1.57)
F9: 身体的攻撃	3~12	3	8	4.80	(1.52)
援助的・肯定的関与	19~76	47	74	62.40	(8.75)
攻撃・叱責	18~72	29	51	41.00	(6.07)
きげんとり・物的報酬	8~32	13	23	17.73	(2.84)

(2) 親子の関わり行動の 카테고리別生起頻度: 各場面における 19 個の行動カテゴリーの生起頻度の平均値と標準偏差を算出した (表2)。“子 PLAY” と “親 PLAY” の得点を合計し、「遊び場面」の得点とした。なお、片付け場面中に子どもが途中退室して実施できなかったケースがあったため、遊び場面は N=15、片付け場面は N=14 となった。

表2 各場面における親子の関わり行動の 카테고리別生起頻度の平均値と標準偏差、および範囲

行動カテゴリー	①子PLAY				②親PLAY				遊び場面(①+②)				③片付け場面			
	最小値	最大値	平均値	(SD)	最小値	最大値	平均値	(SD)	最小値	最大値	平均値	(SD)	最小値	最大値	平均値	(SD)
1 注目する	13	42	36.20	(7.29)	8	42	31.60	(10.84)	21	83	67.80	(16.28)	12	30	22.50	(5.89)
2 笑顔で接する	8	29	17.40	(7.49)	4	38	14.67	(10.73)	13	65	32.07	(16.91)	2	14	6.57	(2.79)
3 目で合図する	2	18	8.67	(5.83)	0	38	10.07	(9.78)	2	53	18.73	(14.04)	0	17	5.57	(4.26)
4 スキンシップ	0	10	1.47	(3.00)	0	4	0.67	(1.11)	0	10	2.13	(3.20)	0	8	1.86	(2.74)
5 名前を呼ぶ	0	13	2.93	(3.20)	0	13	4.20	(4.00)	0	23	7.13	(5.82)	0	14	4.71	(3.91)
6 誉める	0	14	5.33	(4.79)	0	12	4.67	(3.98)	1	26	10.00	(7.65)	0	6	3.07	(1.98)
7 励ます	1	24	11.00	(5.68)	6	26	13.33	(6.03)	14	36	24.33	(9.12)	0	10	5.21	(2.91)
8 なだめる	0	5	0.53	(1.36)	0	3	0.47	(0.92)	0	5	1.00	(1.65)	0	15	1.93	(4.10)
9 同意する	0	4	0.87	(1.25)	0	3	0.27	(0.80)	0	7	1.13	(1.92)	0	1	0.36	(0.50)
10 誘う	0	3	0.53	(0.92)	1	8	3.33	(1.91)	1	9	3.87	(2.03)	0	1	0.21	(0.43)
11 説明する	2	34	14.93	(10.22)	4	29	17.60	(7.96)	10	52	32.53	(14.03)	5	18	10.64	(4.13)
12 質問	1	24	10.67	(6.63)	1	27	9.93	(7.79)	2	41	20.60	(11.65)	1	15	8.50	(4.65)
13 反復・確認・返事	6	30	17.00	(7.30)	6	30	14.33	(6.61)	16	52	31.33	(11.46)	4	14	9.43	(2.68)
14 不同意・疑問	0	4	1.40	(1.24)	0	5	1.93	(1.62)	0	6	3.33	(1.88)	0	4	1.29	(1.27)
15 指示する	0	10	3.13	(2.80)	1	16	6.40	(4.53)	2	23	9.53	(5.89)	1	12	6.00	(3.92)
16 批判する	0	9	1.27	(2.40)	0	11	1.67	(2.82)	0	20	2.93	(4.95)	0	5	1.71	(1.77)
17 禁止する	0	10	0.67	(2.58)	0	5	0.60	(1.35)	0	10	1.27	(2.76)	0	3	0.57	(0.94)
18 叱る	0	1	0.07	(0.26)	0	0	0.00	(0.00)	0	1	0.07	(0.26)	0	2	0.14	(0.53)
19 無視する	0	3	0.27	(0.80)	0	10	1.40	(2.85)	0	13	1.67	(3.52)	0	2	0.64	(0.84)

注1)場面①②は各7分間であるため得点の範囲は0~42である。N=15。

注2)場面③は5分間であるため得点の範囲は0~30である。N=14。

(3) 併存的妥当性の検討: 自記式質問紙で回答した養育スキル尺度得点の高さ/低さが、実際の親子の関わり場面の親の行動を反映したものとなっているか検討するために、表1に示した養育スキルの各高次因子得点の平均値を基準に対象者を高群・低群の2群にわけ、「遊び場面」「片付け場面」に

おける各行動カテゴリーの生起頻度を比較した。仮説として、①「援助的・肯定的関与」得点が高い群の方が親子の関わり場面において「注目する」「笑顔で接する」「ほめる」といったポジティブな行動が多く、「批判する」「叱る」などの行動は少ない、②「攻撃・叱責」得点が高い群は低い群に比べて「批判する」「叱る」行動が多い、③「物的報酬・きげんとり」得点が高い群の方が「なだめる」「同意する」行動が多いと予想された。

まず、「援助的・肯定的関与」低群・高群（以下、SL群、SH群とする）の間で親子の関わり行動カテゴリーの平均値に差があるか検討を行った。 t 検定を行った結果、遊び場面においては親の関わり行動に有意な差は見られなかった（表3-1）。一方、片付け場面においては、「スキンシップ」（ $t(7.32)=2.68, p<.05$ ）、「誉める」（ $t(12)=2.87, p<.01$ ）でSH群の方がSL群より有意に得点が高く、「誘う」（ $t(7.00)=2.05, p<.10$ ）も有意傾向の差が示された。SH群の方が子どもに対してポジティブな関わりが多いという仮説を一部支持する結果が得られた。

次に、「攻撃・叱責」得点についても平均値を基準に低群・高群（以下、AL群、AH群とする）の2群に分けて t 検定を行った。遊び場面において、AL群の方がAH群より「指示する」（ $t(13)=2.50, p<.05$ ）行動が有意に多かった（表3-2）。また、AL群の方が「なだめる」（ $t(6.50)=1.97, p<.10$ ）が多く、「回復・確認・返事」（ $t(13)=2.08, p<.10$ ）が少ない傾向も示された。一方、片付け場面においては「同意する」（ $t(12)=2.34, p<.05$ ）、「不同意・疑問」（ $t(12)=3.85, p<.01$ ）がAL群の方がAH群より有意に多い結果となった。「批判する」「叱る」といったネガティブな行動については両群とも生起頻度が少なく、群による差を確認することはできなかった。しかし、AL群の方がAH群に比べて、日常においても「なだめる」「同意する」といった子どもの気持ちを肯定的に受け止める行動や、「不同意・疑問」「指示する」といったネガティブでない方法で親の要求や考えを子どもに伝える行動を多くとっている可能性が示唆された。

「きげんとり・物的報酬」低群・高群（以下、CL群、CH群とする）についても平均値を基準に群わけをし、同様に比較したところ、遊び場面の「名前を呼ぶ」（ $t(8.84)=2.19, p<.10$ ）、「不同意・疑問」（ $t(13)=1.90, p<.10$ ）、片付け場面の「質問」（ $t(12)=1.91, p<.10$ ）においてCL群の方がCH群よりも得点が高い傾向が見られた（表3-3）。親子の遊び場面という構造上、直接的に子どものきげんをとったり物的報酬を与える行動は生起しにくい場であったと考えられるが、「不同意・疑問」が“子どもの言動に同調・同意しないが否定を伴わないもの”と定義されているため、CL群の方が子どもの言動に同意しない行動が多かったという点で尺度の妥当性が一部確認されたと言えるだろう。

表3-1「援助的・肯定的関与」低群（SL群）と高群（SH群）における、
親子の関わり行動のカテゴリー別生起頻度の平均値の比較

行動カテゴリー	遊び場面(①+②)			③片付け場面					
	SL群(N=6)		SH群(N=9)		SL群(N=6)		SH群(N=8)		
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
1 注目する	67.83	(12.53)	67.78	(19.12)	21.00	(5.25)	23.63	(6.44)	—
2 笑顔で接する	26.17	(13.01)	36.00	(18.73)	6.00	(0.63)	7.00	(3.70)	—
3 目で合図する	15.00	(10.55)	21.22	(16.06)	3.67	(2.73)	7.00	(4.78)	—
4 スキンシップ	1.00	(1.55)	2.89	(3.86)	0.17	(0.41)	3.13	(3.09)	SL群<SH群*
5 名前を呼ぶ	5.67	(4.68)	8.11	(6.55)	2.83	(1.83)	6.13	(4.55)	—
6 誉める	7.50	(9.38)	11.67	(6.30)	1.67	(1.86)	4.13	(1.36)	SL群<SH群**
7 励ます	20.50	(7.12)	26.89	(9.77)	5.00	(2.97)	5.38	(3.07)	—
8 なだめる	0.83	(1.60)	1.11	(1.76)	2.67	(6.06)	1.38	(2.07)	—
9 同意する	1.33	(1.37)	1.00	(2.29)	0.17	(0.41)	0.50	(0.53)	—
10 誘う	3.50	(1.64)	4.11	(2.32)	0.00	(0.00)	0.38	(0.52)	SL群<SH群†
11 説明する	26.17	(13.38)	36.78	(13.49)	8.83	(1.72)	12.00	(4.96)	—
12 質問	18.33	(9.61)	22.11	(13.18)	6.50	(4.59)	10.00	(4.38)	—
13 反復・確認・返事	33.50	(14.52)	29.89	(9.61)	10.00	(1.79)	9.00	(3.25)	—
14 不同意・疑問	3.33	(2.34)	3.33	(1.66)	0.67	(1.03)	1.75	(1.28)	—
15 指示する	7.67	(4.18)	10.78	(6.74)	4.17	(3.76)	7.38	(3.66)	—
16 批判する	1.50	(1.64)	3.89	(6.21)	1.17	(1.83)	2.43	(1.62)	—
17 禁止する	0.50	(0.84)	1.78	(3.49)	0.33	(0.52)	0.75	(1.16)	—
18 叱る	0.00	(0.00)	0.11	(0.33)	0.33	(0.82)	0.00	(0.00)	—
19 無視する	3.67	(5.09)	0.33	(0.71)	0.83	(0.98)	0.50	(0.76)	—

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表3-2「攻撃・叱責」低群（AL群）と高群（AH群）における、
親子の関わり行動のカテゴリー別生起頻度の平均値の比較

行動カテゴリー	遊び場面(①+②)			③片付け場面					
	AL群(N=7)		AH群(N=8)		AL群(N=6)		AH群(N=8)		
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
1 注目する	73.86	(7.67)	62.50	(20.27)	21.67	(6.47)	23.13	(5.79)	—
2 笑顔で接する	37.71	(16.47)	27.13	(16.71)	7.50	(3.94)	5.88	(1.46)	—
3 目で合図する	24.14	(16.57)	14.00	(10.20)	6.83	(5.42)	4.63	(3.20)	—
4 スキンシップ	3.57	(4.12)	0.88	(1.46)	2.17	(2.99)	1.63	(2.72)	—
5 名前を呼ぶ	7.29	(7.11)	7.00	(4.93)	4.67	(3.72)	4.75	(4.30)	—
6 誉める	11.71	(6.34)	8.50	(8.78)	3.50	(1.52)	2.75	(2.31)	—
7 励ます	27.29	(9.50)	21.75	(8.51)	4.33	(2.73)	5.88	(3.04)	—
8 なだめる	1.86	(2.12)	0.25	(0.46)	1.50	(2.35)	2.25	(5.20)	—
9 同意する	0.29	(0.49)	1.88	(2.42)	0.67	(0.52)	0.13	(0.35)	AL群>AH群*
10 誘う	3.57	(1.62)	4.13	(2.42)	0.17	(0.41)	0.25	(0.46)	—
11 説明する	34.00	(14.76)	31.25	(14.24)	10.17	(4.62)	11.00	(4.00)	—
12 質問	25.14	(13.95)	16.63	(8.14)	10.67	(2.66)	6.88	(5.30)	—
13 反復・確認・返事	25.43	(5.88)	36.50	(12.95)	8.50	(3.56)	10.13	(1.73)	—
14 不同意・疑問	2.86	(1.86)	3.75	(1.91)	2.33	(1.03)	0.50	(0.76)	AL群>AH群**
15 指示する	13.00	(6.03)	6.50	(3.96)	6.67	(3.72)	5.50	(4.24)	—
16 批判する	4.14	(7.20)	1.88	(1.36)	1.80	(1.64)	1.88	(1.96)	—
17 禁止する	2.29	(3.86)	0.38	(0.74)	0.83	(1.33)	0.38	(0.52)	—
18 叱る	0.14	(0.38)	0.00	(0.00)	0.00	(0.00)	0.25	(0.71)	—
19 無視する	0.43	(0.79)	2.75	(4.62)	0.33	(0.82)	0.88	(0.83)	—

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表 3-3 「物的報酬・きげんとり」低群 (CL 群) と高群 (CH 群) における、
親子の関わり行動のカテゴリー別生起頻度の平均値の比較

行動カテゴリー	遊び場面 (①+②)				群間比較	③片付け場面				
	CL群 (N=8)		CH群 (N=7)			CL群 (N=8)		CH群 (N=6)		
	平均値	(SD)	平均値	(SD)		平均値	(SD)	平均値	(SD)	
1 注目する	71.88	(8.97)	63.14	(21.84)	—	21.88	(6.33)	23.33	(5.72)	—
2 笑顔で接する	30.63	(15.77)	33.71	(19.25)	—	6.13	(2.10)	7.17	(3.66)	—
3 目で合図する	13.88	(12.53)	24.29	(14.47)	—	4.13	(3.31)	7.50	(4.89)	—
4 スキンシップ	2.50	(2.93)	1.71	(3.68)	—	2.25	(2.43)	1.33	(3.27)	—
5 名前を呼ぶ	9.75	(6.80)	4.14	(2.34)	CL群>CH群 †	4.63	(2.50)	4.83	(5.56)	—
6 誉める	11.63	(7.63)	8.14	(7.82)	—	3.00	(1.60)	3.17	(2.56)	—
7 励ます	26.63	(9.16)	21.71	(8.99)	—	5.50	(3.21)	4.83	(2.71)	—
8 なだめる	0.63	(1.06)	1.43	(2.15)	—	0.88	(1.46)	3.33	(6.06)	—
9 同意する	1.13	(1.25)	1.14	(2.61)	—	0.38	(0.52)	0.33	(0.52)	—
10 誘う	3.88	(0.83)	3.86	(2.97)	—	0.25	(0.46)	0.17	(0.41)	—
11 説明する	32.50	(14.14)	32.57	(15.03)	—	11.13	(4.36)	10.00	(4.10)	—
12 質問	20.50	(7.93)	20.71	(15.61)	—	10.38	(3.74)	6.00	(4.86)	CL群>CH群 †
13 反復・確認・返事	32.25	(13.09)	30.29	(10.21)	—	9.25	(3.24)	9.67	(1.97)	—
14 不同意・疑問	4.13	(1.55)	2.43	(1.90)	CL群>CH群 †	0.88	(1.13)	1.83	(1.33)	—
15 指示する	9.13	(5.33)	10.00	(6.88)	—	5.88	(4.29)	6.17	(3.76)	—
16 批判する	2.00	(1.69)	4.00	(7.16)	—	1.43	(1.27)	2.33	(2.25)	—
17 禁止する	0.13	(0.35)	2.57	(3.74)	—	0.63	(1.06)	0.50	(0.84)	—
18 叱る	0.00	(0.00)	0.14	(0.38)	—	0.25	(0.71)	0.00	(0.00)	—
19 無視する	1.38	(2.07)	2.00	(4.86)	—	0.63	(0.92)	0.67	(0.82)	—

注) † p<.10,

4. 親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連【調査2】

調査2では、父親 143 名、母親 299 名、計 442 名のデータを回収した。回収率は父親 23.7%、母親 46.2%であった。なお、今回は母親・父親ともに2~3歳児のサンプルが少なく量的分析に耐えないと判断したため、2~3歳児の問題行動を測定した「反抗」「分離不安」については分析から除外した。調査2における各下位尺度得点の平均値と標準偏差を表4に示す。

表 4 調査2における各下位尺度得点の平均値と標準偏差

	得点の範囲	母親		父親		保育者			
		N	平均 (SD)	N	平均 (SD)	得点の範囲	N	平均	(SD)
F1: 誘導的しつけ	6~24	296	21.08 (2.90)	137	19.23 (3.43)				
F2: 感情的叱責	8~32	292	18.36 (4.23)	139	17.15 (4.04)				
F3: 注目・関与	6~24	296	18.00 (3.05)	138	17.44 (3.15)				
F4: スパニング	4~16	297	9.58 (2.68)	138	9.68 (3.06)				
F5: 物的報酬	4~16	294	10.24 (2.61)	138	10.65 (2.18)				
F6: 援助的コミュニケーション	7~28	297	23.05 (2.99)	137	21.92 (3.39)				
F7: きげんとり	4~16	289	8.12 (1.89)	137	8.03 (2.06)				
F8: 不適切行動の無視	3~12	296	8.25 (1.70)	136	8.10 (1.61)				
F9: 身体的攻撃	3~12	296	4.62 (1.78)	137	4.22 (1.44)				
育児不安	14? 56	291	36.14 (5.00)	136	33.13 (4.48)				
向社会的行動	11? 44	251	32.47 (5.00)	121	32.74 (5.19)	3? 12	276	8.62	(2.63)
ひきこもり	9? 27	245	11.63 (2.15)	111	11.62 (1.85)	3? 9	242	4.54	(1.37)
攻撃的行動	20? 60	242	28.91 (6.11)	104	30.26 (6.76)	3? 9	243	4.35	(1.62)

(1) 養育スキルと子どもの行動傾向との関連 - 相関分析による検討 -

養育スキル下位尺度得点と子どもの行動傾向について、父母別に相関分析を行った (表5)。表の右上には母親の結果、左下には父親の結果を示した。

表5 養育スキルと育児不安および子どもの行動傾向の各下位尺度間相関

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	育児不安	向社会	ひきこもり	攻撃	保育者評定		
														向社会	ひきこもり	攻撃
F1:誘導的しつけ														.05	-.01	-.11
F2:感情的叱責	-.18*													.12†	-.20**	.14†
F3:注目・関与	.54**	-.23**												.04	.09	-.11
F4:スパンキング	.12	.36**	.18*											.09	-.17*	.12†
F5:物的報酬	.29**	.02	.36**	.03										.04	.05	-.02
F6:援助的コミュニケーション	.62**	-.34**	.55**	-.04	.34**									.01	.04	-.16*
F7:きげんとり	-.18*	.23**	.01	-.04	.27**	-.20*								-.06	.13†	.02
F8:不適切行動の無視	.08	.26**	-.05	.31**	-.15†	-.06	-.21*							.07	-.05	.02
F9:身体的攻撃	-.16†	.54**	.03	.52**	.05	-.25**	.20*	.07						-.07	-.13†	.08
育児不安	-.22**	.41**	-.25**	.11	-.10	-.47**	.24**	.01	.30**					.08	-.07	.11
向社会的行動	.50**	-.15	.34**	.16†	.18*	.49**	-.18*	-.07	-.07	-.32**				.26**	-.28**	.01
ひきこもり	-.12	.35**	-.08	.19*	.10	-.28**	.25**	.05	.10	.19*	-.31**			-.12†	.22**	.01
攻撃的行動	.01	.38**	-.08	.25**	.06	-.24*	.13	.15	.15	.24*	-.20†	.67**		.01	-.07	.37**
向社会的行動(保)	-.12	.07	.01	.17†	-.16†	.10	-.19†	.15	-.04	.06	.41**	-.10	-.03		-.56**	-.07
ひきこもり(保)	-.06	-.11	.05	-.15	.16	.02	.15	-.07	-.06	-.13	-.29**	.13	-.05		-.56**	-.02
攻撃的行動(保)	.11	.06	.03	.14	.10	-.10	.23*	.04	.10	.09	-.03	.13	.22		-.07	

注1) 右上は母親、左下は父親の値を示す。

注2) †p<.10, *p<.05, **p<.01

<子どもの向社会的行動と養育スキルの関連>

子どもの向社会的行動と養育スキル下位尺度の相関分析を行った結果、母親の「F1：誘導的しつけ」「F3：注目・関与」「F5：物的報酬」「F6：援助的コミュニケーション」と子どもの向社会的行動との間に弱い正の相関がみられた。一方、父親の養育スキルと子どもの向社会的行動についても同様の傾向がみられ、「F1：誘導的しつけ」「F3：注目・関与」「F5：物的報酬」「F6：援助的コミュニケーション」と子どもの向社会的行動との間に中程度から弱い正の相関が、「F7：きげんとり」との間に弱い負の相関がみられた。したがって、父母共に「誘導的しつけ」、「注目・関与」、「援助的コミュニケーション」といった受容的・肯定的なスキルを多く用いるほど、子どもの向社会的行動も多いことが示された。

<子どものひきこもり傾向と養育スキルの関連>

子どものひきこもり傾向と母親の「F1：誘導的しつけ」「F6：援助的コミュニケーション」との間に負の相関が、「F2：感情的叱責」「F4：スパンキング」「F5：物的報酬」「F7：きげんとり」との間に正の関連がみられた。父親の養育スキルと子どものひきこもり傾向では、「F2：感情的叱責」「F4：スパンキング」「F7：きげんとり」との間に有意な正の相関が、「F6：援助的コミュニケーション」との間に負の相関が認められた。

<子どもの攻撃的行動と養育スキルの関連>

子どもの攻撃的行動については、母親の「F3：注目・関与」「F6：援助的コミュニケーション」との間に有意な負の相関が、「F2：感情的叱責」「F4：スパンキング」「F5：物的報酬」「F8：不適切行動の無視」「F9：身体的攻撃」との間に有意な正の相関がみられた。父親の養育スキルと子どもの攻撃的行動の関連については、「F2：感情的叱責」「F4：スパンキング」「F6：援助的コミュニケーション」との間に有意な関連がみられた。

(2) 養育スキルが子どもの行動傾向に与える影響 - 共分散構造分析による検討 -

本研究では、親の養育スキルが子どもの向社会的行動や問題行動の形成にどのような影響を与えて

いるのか検討することを目的とした。そこで、観測された親評定と保育者評定の得点から推定される子どもの行動傾向を潜在変数として仮定し、養育スキルの各下位因子からその潜在変数にパスを引くモデルを設定し、共分散構造分析を行った。なお、養育スキルの下位尺度間で有意な相関が認められた変数同士には共変関係を想定した。親評定と保育者評定がそろった上で、全ての評定に欠損値のなかったデータは母親 162 名、父親 78 名であった。父親評定については十分な数のサンプルが得られなかったことから、今回は母親のデータのみを用いて「向社会的行動」「ひきこもり」「攻撃的行動」について、それぞれ分析を行った。

<母親の養育スキルが子どもの向社会的行動に与える影響>

母親の養育スキルが子どもの向社会的行動に与える影響を検討するために共分散構造分析を行ったところ、図 2 のような結果が得られた。数値は標準化係数、実線は正のパス、点線は負のパスを表す。モデルの適合度は、 $\chi^2(25)=21.00$ ($p=.69$), GFI=.98, AGFI=.94, CFI=1.00, RMSEA=.00, AIC=103.00 であり、一定の基準は満たしていると判断できる。子どもの向社会的行動に対して、母親の「F4 : スパニング」($\beta=.32$, $p<.05$) のみが有意なパスを示した。しかし、Stormshak, Bierman, McMahon & Lengua (2000) において「スパニング」は反抗・攻撃・多動衝動といった破壊的行動に影響を与えていることが報告されており、本研究においても「スパニング」は親評定の子どもの問題行動と向社会的行動の両方と正の相関が見られている。コントロールされたスパニングは文化圏によってはごく普通の養育行動であるが、懲罰的なしつけに用いられると子どもにネガティブな影響も与えるため、注意が必要だと考えられる。

<母親の養育スキルが子どものひきこもり傾向に与える影響>

続いて、母親の養育スキルが子どものひきこもり傾向に与える影響について検討した。その結果、ひきこもりに対して、母親の「F7 : きげんとり」($\beta=.49$, $p<.001$), 「F8 : 不適切行動の無視」($\beta=.28$, $p<.01$) が有意なパスを示した(図 3)。適合度指標は $\chi^2(25)=30.45$ ($p=.21$), GFI=.97, AGFI=.91, CFI=.98, RMSEA=.04, AIC=112.45 であった。三鈷・濱口 (2006) においても「一時的なきげんとり」の回避からひきこもり傾向に有意なパスが見られ、今回の結果と類似した傾向がみられた。また、中津・高梨・佐々木 (1995) は、不安感情の高い子どもの母親は、幼稚園入園前後のことで思い悩むことが多く、どちらかと言えば過保護の傾向があると報告している。このように、「きげんとり」は子どもの内在化問題に影響を与える養育スキルである可能性が示唆された。一方、「不適切行動の無視」については、ペアレント・トレーニングでも使われているスキルであり(例: Forehand & Long, 1996)、適切に使用すれば子どもの不適切な行動の消去につながると考えられる。しかし、「感情的叱責」や「スパニング」と正の相関を示していることから、普段の子育ての中では懲罰的な意味合いで子どもに用いられていることが多く、内在化問題を憎悪させてしまう可能性がある。

<母親の養育スキルが子どもの攻撃的行動に与える影響>

最後に、母親の養育スキルが子どもの攻撃的行動に与える影響についても、同様に分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2(25)=19.94$ ($p=.75$), GFI=.98, AGFI=.94, CFI=1.00, RMSEA=.00, AIC=101.94 となった(図 4)。「F2 : 感情的叱責」($\beta=.26$, $p<.01$) から子どもの攻撃的行動に対して有意なパスが得られた。三鈷・濱口 (2006) においても母親の「感情的な叱責の抑制」から子どもの攻撃的行動

動に対して有意なパスがみられ、本研究と一致した結果が報告されている。『デリングは、ポジティブな行動もネガティブな行動も最も強力に学習される方法の一つ』(Forehand & Long, 1996) と指摘されているように、親が感情的に叱ったり攻撃的な振る舞いを多くすることで、子どもも同様の行動を学習し、問題行動を増加させている可能性がある。

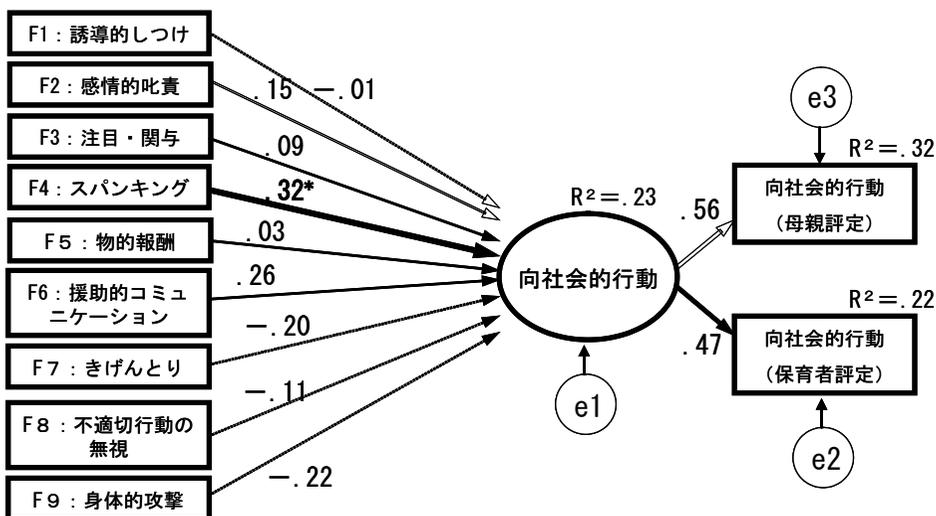


図2 母親の養育スキルから子どもの「向社会的行動」へのパスダイアグラム
 注) 養育スキル下位尺度間に有意な相関がある箇所には共変関係を設定したモデルとしたが、パス図からは省略している。実線は正のパス、点線は負のパスを表す。太線は有意なパス。(* $p < .05$)
 $\chi^2(25)=21.00$ ($p=.69$), $GF1=.98$, $AGF1=.94$, $CF1=1.00$, $RMSEA=.00$, $AIC=103.00$

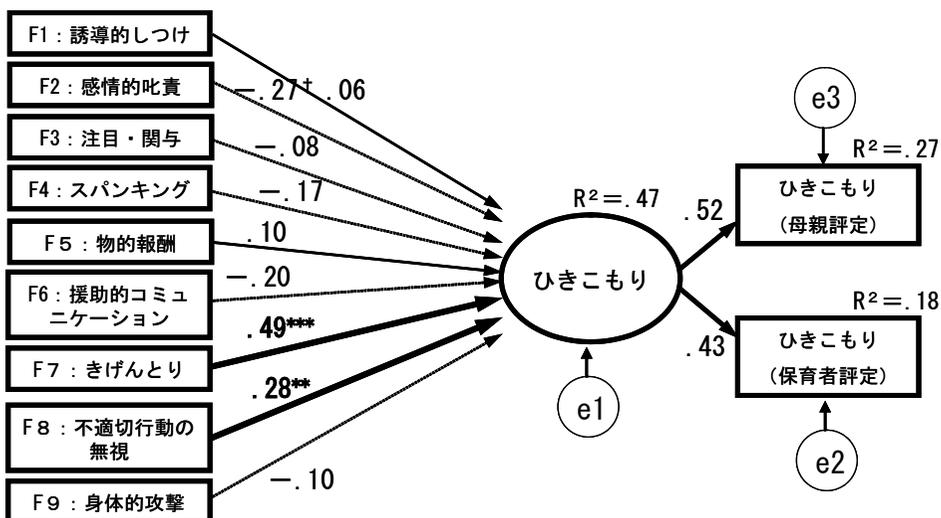


図3 母親の養育スキルから子どもの「ひきこもり」へのパスダイアグラム
 注) 養育スキル下位尺度間に有意な相関がある箇所には共変関係を設定したモデルとしたが、パス図からは省略している。実線は正のパス、点線は負のパスを表す。太線は有意なパス。(***) $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$)
 $\chi^2(25)=30.45$ ($p=.21$), $GF1=.97$, $AGF1=.91$, $CF1=.98$, $RMSEA=.04$, $AIC=112.45$

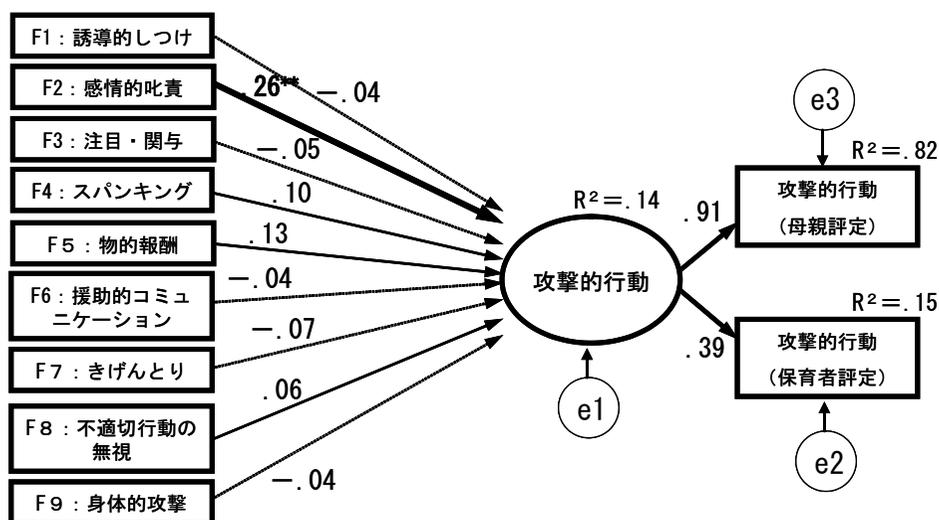


図4 母親の養育スキルから子どもの「攻撃的行動」へのパスダイアグラム
 注) 養育スキル下位尺度間に有意な相関がある箇所には共変関係を設定したモデルとしたが、パス図からは省略している。実線は正のパス、点線は負のパスを表す。太線は有意なパス。(** p<.01)
 $\chi^2(25)=19.94$ ($p=.75$), $GF1=.98$, $AGFI=.94$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$, $AIC=101.94$

まとめと今後の課題

本研究では、まず、父親・母親の養育スキルを測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。その結果、「誘導的しつけ」、「感情的叱責」、「注目・関与」、「スパンキング」、「物的報酬」、「援助的コミュニケーション」、「きげんとり」、「不適切行動の無視」、「身体的攻撃」の9因子からなる養育スキル尺度が作成され、一定の信頼性・妥当性を有した尺度であることが示された。さらに、養育スキル尺度の併存的妥当性を検討するために親子のコミュニケーションの行動観察も実施した。その結果、片付け場面において「援助的・肯定的関与」高群の方が「スキンシップ」「ほめる」「誘う」といったポジティブな行動が多かったこと、「きげんとり・物的報酬」低群の方が遊び場面において「不同意・疑問」が多かったことから、仮説の一部は支持されたといえる。「禁止する」「叱る」「なだめる」などの生起頻度の低い項目については実験場面において観察することが難しく、予想された関連は見られなかった。よって、養育スキル尺度の併存的妥当性は一部支持されるに留まったため、実験の構造や観察する行動カテゴリーの内容をより精緻化し、サンプル数を増やして検討していく必要がある。

次に、母親の養育スキルが子どもの行動傾向に与える影響を検討した結果、①「スパンキング」が子どもの向社会的行動に影響を与えること、②「きげんとり」や「不適切行動の無視」を少なくすることで子どものひきこもり傾向を軽減できる可能性があること、③子どもの攻撃的行動を低減するためには「感情的叱責」を減らすことが有効であること、が示唆された。以上のように、本研究において子どもの向社会的行動および問題行動と関連の強いいくつかの養育スキルが示された。

最後に、本研究の今後の課題を述べる。第一に、質問紙調査において低年齢の子どもをもつ親からの有効回答が少なかったこと、母親に比べて父親サンプルが少ないことが挙げられる。回収率も父親については特に低く、本研究での結果を一般化できない可能性もある。今後、調査対象者数を増やして再度検討する必要がある。第二に、本研究では一時点の調査しか行っていないため、縦断的な研究によって因果モデルを検証する必要がある。第三に、母親の生育歴やパーソナリティ、仕事、夫婦関係、ソーシャルサポートなどさまざまな要因が親の養育に関連していると考えられる。養育スキルが子どもに与える影響だけでなく、親の養育スキルに関連するさまざまな要因についても検討することで、子育て中の親が適応的な養育スキルを獲得するための介入・支援にとって有効な知見が得られるであろう。

引用文献

- Forehand, R. & Long, N. 1996 Parenting the strong-willed child: the clinically proven five-week program for parents of two-to six-year-olds. 小羽俊士 (訳) 2003 困った子が5週間で変わる—親にできる行動改善プログラム 日本評論社.
- 深谷昌志 2008 日本の子育て事情 現在の育児状況 深谷昌志 (編) 育児不安の国際比較 学文社 pp.9-27.
- 藤井和子 2003 ペアレントトレーニング・プログラム—AD/HD を持つ子どもと親への理解と援助のために— 小児の精神と神経, **43**, 1, 18-22.
- 井瀨知美・上林靖子・中田洋二郎・北道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美 2001 Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の精神と神経, **41**, 4, 243-252.
- 上林靖子 2003 わが国における AD/HD 臨床の現在 小児の精神と神経, **43**, 1, 5-14.
- 牧野カツ子 1982 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉 家庭教育研究所紀要, **3**, 34-56.
- 森下正康・庵田奈甫 2005 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **15**, 47-56.
- 無藤隆 2008 家庭と園と地域における子育て支援 無藤隆・安藤智子 (編) 子育て支援の心理学 有斐閣 pp.1-16.
- 中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子 1999 幼児の行動チェックリスト (CBCL/2-3) の日本語版作成に関する研究 小児の精神と神経, **39**, 305-316.
- 中津郁子・高梨一彦・佐々木保行 1995 幼稚園生活における幼児の不安感情に関する研究—第1報 母親の養育行動・態度と幼児の生活実態との関連— 小児保健研究, **54**, 15-21.
- 大隈紘子・免田賢・伊藤啓介 2002 治療と指導—ペアレント・トレーニング— 小児科診療, **6**, 955-959.
- 三鈷泰代・濱口佳和 2006 乳幼児をもつ母親の育児不安と養育スキルおよび子どもの問題行動との関連 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, p666.

- 三鈷泰代 2008a 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究 筑波大学大学院人間総合科学研究科平成 19 年度修士論文（未公開）
- 三鈷泰代 2008b 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究—親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連—（中間報告） 発達研究, **22**, 181-190.
- 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘・立本真 2001 地域子育て支援センターにおける親子への対人行動訓練 養育スキル査定法の開発 平成 12 年度産学連携等研究 研究成果報告書.
- 品川不二郎・品川孝子 1992 TK 式幼児用親子関係検査 田研出版.
- Stormshak, K., Bierman, K., McMahon, R. & Lengue, L. 2000 Parenting Practices and Child Disruptive Behavior Problems in Early Elementary School. *Journal of Clinical Child Psychology*, **29**, 1, 17-29.
- 寺西美恵子 2006 ビデオによる親子の関わりの自己観察が育児に及ぼす影響—自我の発達期の母子の遊び場面を対象として— 筑波大学大学院教育研究科平成 17 年度修士論文（未公開）
- 戸田須恵子 2000 母親の育児ストレスと幼児の気質及び養育態度との関係について 北海道教育大学紀要（教育科学編）, **50**, 2, 35-45.

謝 辞

本研究を実施するにあたり、筑波大学人間総合科学研究科 濱口佳和教授に多大なご指導を賜りました。心より感謝致します。調査の実施にご協力頂きました、幼稚園・保育所の先生方、保護者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

